インターナショナル・バイブルフェローシップ

テーマ「比較宗教学から見たキリスト教」

＜なぜキリスト教は、日本人に受け入れられないのか＞

日時　　９月 22 日　13 時～

命　題　　キリスト教の宣教の歴史において、日本宣教ほど難しい国は例を見ません。これまでにどれほどの熱意を持った宣教師が送り込まれ、祈りがささげられ、費用がつぎ込まれてきた事でしょう。日本という国の精神風土とキリスト教の体質がうまくかみ合わない事を念頭に、この国の宗教観を学びます。

序論　170 年かけて 1%とは

江戸末期にキリスト教が伝えられて、170 年が過ぎました。キリスト教はこの 170 年の中で、全国の都市部を中心に約 8900 の教会があります。しかし、人口の 1%という状況です。企業であれば、すでに倒産しています。すでに皆さんもご存じのとおり、キリスト教は教育の分野と福祉の分野と人権や社会制度においては、この国に多大の貢献をしています。ところが肝心の宗教の分野においては、日本人に受け入れられてはいません。なぜでしょう。今日のテーマはこのことです。なぜ、キリスト教が日本において、市民権を得られないのか、それにはいくつかの理由が考えられます。

本論１　避けられる日常生活上の理由

まず初めに、私たちの普段の生活の視点から見てみましょう。

その１　キリスト教は、毎週の礼拝を大切にします。また、礼拝後には学び会や奉仕や交わりがあります。それは、キリスト教にとっては当然のことですが、日本人にとっては苦痛であり、長く退屈な束縛と映ります。日本の宗教では、決まった行事や祭りの時には、神社やお寺に行きますが、普段は仏壇や神棚を拝めば後はそれぞれ自由です。毎週教会に行く事は、自分の時間を束縛されることになり、そうした事は嫌がられます。

その２　キリスト教では、普段の生活に、「〇〇すべき」と言うことが語られます。これも、キリスト教にとっては自然なことですが、仏教や神道においては、生活の事についてはおおらかに対応します。仏教でも戒律はありますが、在家の人には細かい事を求めません。このため、「こうるさい」キリスト教は敬いながらも避けられます。

その３　宗教上、信仰のために何らかの犠牲が生じる事は避けられません。キリスト教では、奉仕や献金も必要なこととして求められます。しかし、日本の宗教は基本的にご利益性が強いため、従う・ささげると言うことが苦手です。必要があれば犠牲を払いますが、普段は「神仏の恩恵」を期待するため、長期において従う・捧げる事は体質に合いません。

本論２　避けられる信仰内容（教義）上の理由

仏教はもともと神道とはずいぶん違った宗教でしたが、時間の経過の中で、互いに歩み寄り、神仏混淆・神仏一体となりました。日本人にとっては、神と仏は同じです。ところがキリスト教は、これらと旗色が違っていました。

その１　キリスト教で語る神は、「唯一の真の神」です。この事は、排他的な意味を持っています。日本的な汎神論的な多神教とは、真っ向から対立します。日本の神々は、多神教の「天神・地祇」であり、仏教の神々も多く存在します。これらの神々は、共存し助け合っています。そこに、唯一神を名乗るキリスト教がはいって来ましたので、みんな仲良くとはいかなくなりました。キリスト教に従えば、神仏の中から選択をしなければいけなくなり、それが本能的に嫌われます。

その２　キリスト教では、「キリスト以外に救いはない」と語ります。この事もまた日本人には受け入れがたい事です。日本人にとって、「宗教はみんな一緒」というのが普通の考えです。そう考えるため、仏教も神道も争うことなく、1500 年うまくやって来ました。キリスト教はこの関係を危うくすることになり、選択する事、優劣をつける事を避けるために、距離を取る結果になりました。しかし、一つの信仰（宗派や教派）を持っている人は、「自分の信仰が一番大事」と考えていますが、それを表面には現しません。もめるのを避けるためです。暗黙の了承を大切にします。

本論３　避けられる馴染みにくさからの理由

キリスト教は、お寺や神社のように、「ふらっと」行ける場所ではありません。敷居が高いと感じている方は多くいます。なぜでしょう。

その１　教会はこれまで、地域に向かって積極的に関わることを避けてきました。「来てください」という待ちの姿勢でした。時々、バザーやコンサートや講演会等で地域にアッピールしたものの、普段は閉鎖的（何をしているか分からない）でした。外部の人から見れば、まるで「修道院のよう」でした。なぜそうなったのか、理由があります。キリスト教は戦前までは、招かれざる客でした。「ヤソ教」という扱いの延長上にありました。この為、防衛的な心理状態となっていました。加えて、キリスト教は、世の中を「罪の世」と考える傾向があります。このため、世の中と積極的に教会が関わることを自らも避けてきました。

その２　明治以降の宣教師たちは、熱意と信仰を持って「日本宣教」を目指しました。その時の考えには、日本の文化や宗教への偏見や否定や傲慢さが潜んでいました。日本の事を理解しないで、福音を伝えた結果、日本人のプライドを傷つけました。「バタ臭い宗教」と日本人には映りました。このため、ごく普通の日本人はキリスト教と距離を取り、従来の神仏を大切にしました。明らかに、一方的に独善的に、キリスト教を紹介してしまいました。戦後は変化してきましたが、第一印象が悪かったのを改めてもらうのは大変です。

本論４　避けられる価値観上の理由

日本人にとって、宗教は「利用する」ものであって、「仕える・従う」ものではありません。主導権は自分が持っていて、必要な時に必要な宗教を用いると言うのが、基本的な考えです。キリスト教はこの原則に反する厄介な宗教と避けられます。

その１　日本では昔から、宗教は上から押し付けられてきました。神道も仏教も同様です。この為、宗教はいつの間にか「家の宗教」となり、個人は宗教と距離を取るようになりました。必要があれば求めても、普段は敬って遠ざけると言う姿勢です。ところがキリスト教は、生活の中まで入り込もうとします。時間も生活も価値観までも束縛されるように感じてしまいます。このため、教会に行っても信仰は持たない（懲りない）、キリスト教ファンの位置

を保とうとします。教会には行かないが、自分はキリスト教の神を信じると言う方が、5%にのぼると言うことです。

その２　宗教に対する偏見が、人をキリスト教や宗教全体から遠ざけています。それは、宗教は「弱い人がするもの、うさん臭い、年を取ったら必要、一度は入ったら出られない」などと言った印象が形作られている事です。つまり、これは宗教そのものや宗教家の責任です。尊敬される言動が少なかったために、人は宗教を敬遠しているのです。時々見かける札、「宗教とセールスお断り」のように自業自得と言えるでしょう。別の言い方をすれば、宗教は「気休め」「通過儀礼」でしかありません。

まとめ　日本のキリスト教のするべき工夫

仏教は日本人に馴染んでもらえるのに、700 年の歳月を要しました。飛鳥時代に紹介され、その後保護を受けて鎌倉時代に日本仏教と呼ばれる宗派が誕生しました。キリスト教はまだ 170 年です。日本という国は、寛容・親切に見えて実は極めて保守的で、部外者には閉鎖的です。キリスト教が日本に受け入れられるためには、・・・

①日本の伝統文化や宗教を学び、敬意を払うこと、
②教会の働きを地域に広げ、地域社会のために具体的に役立つことをすること、
③キリスト教の教義や信仰を、もっと日本人に分かる工夫をすること、
④信仰と生活をつなぎ、信徒の日常生活の事についても関心を持つこと、
⑤地域にある諸教会が、教派や教団の壁（無関心）を越えて協力し合うこと等・・・
をあげることが出来ます。

担当：勝本　正實

質問を受けます。＜メモ＞